



加
 治
 田

東
 濃

華
 嶽
 下

特別
 15
 6673
 35
 早稲田大学図書印



明和六己世歳旦



立ちの年の夢よも

此世と世しして

竹珂園

のぞくはよ

見尔

さきり敏さよ

祈の物

聖帝

心し仕付夢まふと忘る初

蕉雨庵 巴山

真方の神もちりけ給言

見尔

痛も糸と掛る老木の松竹で

又休坊

各詠

中川よりと程はまきりマ初日のか

彦夕

沖東風も定ううそれと解り

花老

走くく一実新玉のまうりとて

可河

空は造化しめてまふこの掛世

竹布

掃神の塵とりもまはつ成を

仙帝

神事あ々杖もまの心はくも

有隣

為事あ々心とまを新ハるり人も

杏花

大徳く先まのゆりと喜の又

歳今

右の翁も張ありかう海

吾とむく

門をくはくちまね老の気よあま

一溪

史ふれ一居後後の池子よむひ古

其相

子眞言

有果

蕉雨庵の年ん年よりて

松の一本も葉あり

静さ小咲やまゝも年一の柳

吉左

成り一々短く炭つぎを走

巴

必群うもむし節しほさあつて

貝尔

念休、今のちやう休法

左也

細く、比車のおれあつても

山登

おりのつゝ水は流文のち

有儀

わう歌さも流るゝまむ月の歌

彦又

老の中、まのく酒のこ

仙市

此の歌は月まゝも屋敷もくも歌
うけり任二様のさるる、前より
三流れとんぬ一好又さるる流
嶽とくたふたふ小持の縁仍
むとら欠と一もか、流市酒の
喧しきももゆるさふとく人目稀
あり宗寂の比、よあさるるハ

山嶽の鳥居もくも又連り別てハ
朝夕の言修言しとく定まらぬ小
おろし、俗又しゆしとく他修言の
不ともいふか、彫師ももあつ
る、以てむらう困窮を裏、春を以
悠悠とくちんちん言り、年の
まぬと歌しとく

堂事坊

くまひ連て茶もつらき流り年本想

むと日ひとぬと清く流りあつ

二三子とそとふ後笑しとく

甚趣居

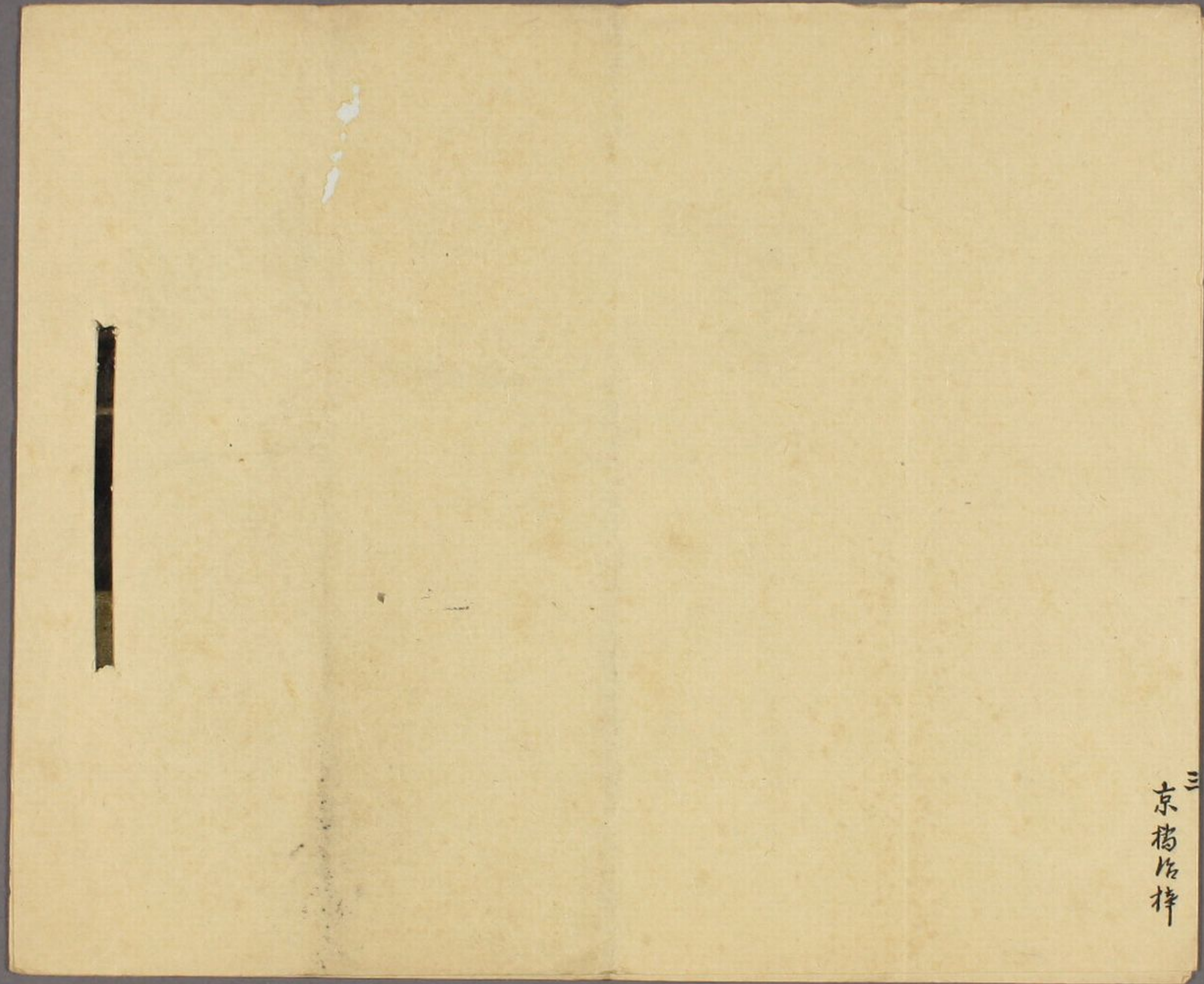
小流あつ少ぬか、あつ年つまれ

市中、あつまゝ、う用とのこ
好む、且つ、のう目ま、あつと
自こ、ま、ま、ま、ま、ま

作初ま

何しん人下れ、何しん

山登り



三
京橋店梓